

## 『駒沢史学』 五十号出版記念にあたりて

阿 部 肇 一

「駒沢史学」五十号の編集をするのでその回顧と展望をという依頼に、すでに五十回も出版したのかと感無量である。ここまでにいたる駒沢史学会を担ってきた関係諸氏の努力に衷心より敬意と祝意を表するものである。

思い起せば、昭和二十七年（一九五二）「駒沢史学会」設立の企画がなされ、翌二十八年一月に創刊号『駒沢史学』を世に出し、続く四月には第二号を出刊し、ここに名実ともに新制大学としての駒沢大学史学会の発足が地につき、将来へ向って羽搏きをはじめたのであった。私も旧制大学を卒えた頃であったが、はじめ元専門部の級友鮎田龍全君が、新制大学文学部の歴史学科に再編入し、一期生として情熱を燃していた。彼が「専門部高等師範部（専門学校令）から新制大学へ移行したのであるから、やはり学会がなければ研究の府とは言えない。何としても作りたいので級友たちと相談し、教授先生方に協力依頼を話している」という話を聞いて、両手を挙げて賛成し、援助を約した。問題は出版費用とその継続だが、各方面の寄附と大学の当局の援助を要請し快諾を得ている、ということであった。彼も大学への思い出に他の者よりも立派な卒論を是非とも書きあげたい、出来得れば創刊号にも載せたいという強い意気ごみをもち私にも感じとれた。ともに寺院出身なので、小生の扱っている東洋史学の中から、唐代あたりの寺院経済は面白いぞ、といったことを、彼は見事に難史料をこなして、それを創刊号に飾った。

当時、日本史の教授に丸山二郎、玉村竹二、小西四郎、東洋史に岩井大慧、関野 雄、周藤吉之、西洋史に竹内直良、佐藤

堅司、石橋英夫の諸先生碩学が執筆され、学界に異彩を放ったことも事実である。学生たちも鮎田君の他に西幸保、加藤茂男、大庭 実、高橋久男、三木太郎、稲村徹元、久我幸一らの諸君が論文寄稿してきたことも意義ごみの大きさが判る。『駒澤史學』の旧字の表題も懐しい思い出である。創刊当時出版事情も悪く、誤植だらけで五十頁足らず、若干恥しい思いもしたが、出版回数が増すごとに充実と正確を加えてきた。事務局も常任委員六名、委員六名決まり、小生も現在の葉貫磨哉教授と共にその一翼を担うことになった。その『駒沢史学』が今や三〇〇頁にも及ぼんとする大会誌を年一回以上世に問うまでになってきている。史学の名の通り、日本、東洋、西洋、考古等多方面の実証研究を中心に、会員諸氏の動向を詳細に述べ、創刊時代の情熱の伝統は今でも湧きあがっていることは喜しき限りである。あれから四十五年以上経て、ここに五十号誌を世に問うことになった。その『駒沢史学』を培ってきた多くの学生たちの中に、その伝統を継ぐ者たちが続々と現れていることも、本学会の無窮の表れとみるべきである。本学会出身の飯島武次、広瀬良弘、久保田昌希の各教授、酒井清治助教授、松本信道講師はいうに及ばず、他大学より来られた日本史南和男、所理喜夫、佐藤元英の各教授、瀧音能之助教授、東洋史渡辺惇教授、西洋史伏島正義教授、佐々木真講師、歴史茂澤方尚助教授等の方々と共に前進しつつある。ここにたゆみなき本学会の発展を希い、祝意としたい。